

ライオン
口腔保健活動
100年の
歩み

ライオン
口腔保健活動
100年の
歩み

はじめに

ライオン(株)は、1891年(明治24年)に東京・神田で小林富次郎商店として創業しました。以来、120余年。私たちは、「事業を通して人々の幸せに奉仕する」という小林富次郎の創業の志を胸に、ハミガキや石鹸・洗剤、医薬品などの事業活動を幅広く展開する一方、人々の幸せに奉仕する社会貢献活動に精力的に取り組んできました。

とくに、1913年、食生活の変化に伴うむし歯の急増に危機感を抱き、人々の健康に貢献したいと願う燃えたぎるような情熱から始まった口腔保健活動は、正しい歯みがき方法の指導から、口腔衛生思想の普及、歯科検診活動、最先端の歯科診療開設など幅広い領域へと拡大。一企業の社会貢献活動として空前の

規模へと成長しました。今日では、公益財団法人ライオン歯科衛生研究所が活動の母体となり、予防歯科の普及や、歯の健康を通じた健康寿命の延伸など、時代に合わせた新たな挑戦を続けています。

本書は、こうしたライオン（株）の口腔保健活動の歴史と、それを支えた先人たちの想いをまとめたものです。創業以来、脈々と受け継がれてきた社会奉仕の精神と、トータルオーラルヘルスケアカンパニーとして、日本の口腔保健活動を牽引してきた熱い軌跡をご覧ください。

2017年5月

公益財団法人ライオン歯科衛生研究所

理事長 藤重 貞慶



100年の歩み

1913年(大正2年)から始まった

ライオンの口腔保健活動。

「学童向け活動」、

女性を中心とした「成人向け活動」、

「歯科診療活動」の3分野で

日本の口腔衛生をリードする

多彩な活動が行われた。

1932年(昭和7年)

「第1回学童歯磨教練
体育大会」開催



1922年(大正11年)

学童への「歯磨教練」開始



1913年(大正2年)

ライオン講演会スタート



1918年(大正7年)

学校教職員への
口腔衛生講座開始

1921年(大正10年)

「ライオン児童歯科院」開設



日本初の
児童専門
歯科診療所

1927年(昭和2年)

「ライオン児童歯科院」内に
「ライオン・デンタルセンター」開設



予防歯科の
原点

日本の主なできごと

1912年 大正天皇即位

1914年 東京駅開業

第一次世界大戦勃発

1920年 第1回箱根マラソン

1923年 関東大震災

1925年 ラジオ放送開始

1926年 昭和天皇即位

1928年 ラジオ体操操スタート

1929年 世界恐慌

1930年 お子様ランチ登場

学童向け
口腔保健活動

1953年(昭和28年)

13年振りに「第10回学童
歯磨訓練大会」開催



1952年(昭和27年)

全国を巡回した動く診療所
「ライオン・ヘルスカー」登場



1961年(昭和36年)

産業歯科保健活動
「さくらんぼ運動」開始



1959年(昭和34年)

母子歯科保健活動
「たんぼぼ運動」開始



女性を中心とした
成人向け
口腔保健活動

1952年
(昭和27年)

母と子のよい歯の
コンクール協賛



歯科診療活動

1964年(昭和39年)

「(財)ライオン歯科衛生研究所」設立

- 1963年 日本初の原発
東海発電所稼働
- 1958年 東京タワー完成
- 1955年 高度経済成長始まる
- 1953年 テレビ本放送開始
- 1952年 鉄腕アトム連載開始
- 1951年 黒澤明監督「羅生門」
ベネチア映画祭グランプリ
- 1949年 湯川秀樹ノーベル
物理学賞受賞
- 1946年 サザエさん連載開始
- 1945年 太平洋戦争終戦
- 1941年 太平洋戦争開戦
- 1937年 日中戦争開戦

1998年(平成10年)

マレーシアで
口腔保健活動開始



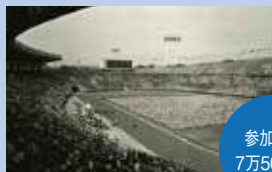
1984年(昭和59年)

海外での
口腔保健活動開始(台湾)



1965年(昭和40年)

史上最大規模で国立競技場で開催
「第22回学童歯磨訓練大会」



参加児童
7万5000人

1974年

(昭和49年)
「たんぼ号」で、
母と子の口腔
保健活動を強化



1964年(昭和39年)

新宿京王百貨店に
「ライオン・ファミリー歯科診療所」開設



予防、診療
研究を行う
歯科センター

2000年

(平成12年)
ハンディキャップの
ある方への口腔
保健活動に注力



- 1996年 携帯電話の普及が始まる
- 1995年 阪神淡路大震災
- 1993年 Jリーグ開幕
- 1989年 年号が平成に
- 1988年 青函トンネル開通
- 1986年 バブル経済に突入
- 1983年 東京ディズニーランド開園
- 1982年 TV「笑っていいとも！」開始
- 1975年 沖縄海洋博覧会開催
- 1973年 第一次オイルショック
- 1972年 札幌冬期オリンピック開催
- 1970年 大阪万国博覧会開催
- 1968年 川端康成ノーベル文学賞受賞
- 1964年 東京オリンピック開催
東海道新幹線開業

グローバル化する口腔保健活動

2013年(平成25年)
アジアから7カ国が参加
「第70回学童歯みがき大会」



2008年(平成20年)
インターネット配信始まる
「第65回学童歯みがき大会」



2006年(平成18年)
「キッサニア東京」で
歯科医院のパビリオン出展



2016年(平成28年)
健口美体操開始



2007年(平成19年)
高齢者向け口腔保健活動開始



2006年(平成18年)
思春期口腔保健活動開始



ライフステージ別活動の開始

2016年(平成28年)
LDHシンポジウム開催



予防歯科の習慣化をめざして

2013年
東京オリンピック決定

2012年
東京スカイツリー完成

2011年
東日本大震災

2010年
「はやぶさ」帰還

2008年
リーマンショック

2005年
愛・地球博開催

2003年
宮崎駿 アカデミー賞受賞
「千と千尋の神隠し」

2002年
サッカーワールドカップ
日韓大会

目次

序章

事業を通して社会に貢献する ライオン創業物語

10

- ・ 禍福は糾える縄の如し
- ・ 人は利欲のために生きるにあらず
- ・ 小林富次郎商店の創業
- ・ 約70億円を全国の慈善施設へ
- ・ 「ライオン」のユニークな宣伝活動①

第1章

慈善券に次ぐ第二の社会貢献を 口腔保健活動の幕開け

18

- ・ きっかけは食生活の大きな変化
- ・ 歯科医師会による口腔保健活動
- ・ それは、講演会から始まった

第2章

歯科診療の発展に貢献する 歯科診療活動

24

- ・ 日本の近代歯科医療の幕開け
- ・ 12年間で約54万人の児童を診療
- ・ ひろがる、民間企業の活動
- ・ 世界をリードする歯科センターへ
- ・ 日本に児童専用の歯科医院を
- ・ 日本初「口腔衛生婦」の育成
- ・ 時代を先取る予防歯科のはじまり
- ・ さらに進化する歯科診療活動

第3章

子どもたちをむし歯から守る 学童向け口腔保健活動

34

- ・ 児童のむし歯保有率96%
- ・ 10年間・2万校・2600万人
- ・ 国による初の口腔保健活動
- ・ 焼け野原からの再出発
- ・ 待ちわびた学童歯みがき大会の復活
- ・ コラム「ライオンのユニークな宣伝活動」②
- ・ 子どもたちの心を掴むユニークな活動
- ・ 戦時下も続く歯磨教練体育大会
- ・ 復興の街に笑顔を届ける

第4章

母子へ職場へ社会へ、ひろがる活動

成人向け口腔保健活動

- 人気を集める衛生博覧会
- たんぽぽのように強く美しく
- 新しい時代に、新しい活動を

- 盛り上がる戦後の口腔保健活動
- 大好評、職場での歯科相談
- コラム「ライオンのユニークな宣伝活動」③

第5章

これからのオーラルケア

ライオンがめざす未来

- 国民運動へのひろがり
- ライフステージ別活動

- 「健口美」の実現でQOL向上を

学童期 大切な健康習慣を子どものうちに

成人期 歯周病の啓蒙活動を強化／歯周病は全身疾患につながる／歯周病対策で医療費抑制

高齢期 健康寿命の延伸をめざして／健口美体操で口を元気に

コラム「世界で評価されるライオン・歯科衛生生研究所」

- ライフステージ別の元氣習慣を提案
- 歯科衛生士が「予防歯科」の担い手に
- 情報のバリアフリー化に挑戦
- 健康寿命の延伸へ向けて
- もうひとつのテーマ「予防歯科」
- 世界へひろがる「学童歯みがき大会」
- コラム「歯みがき文化を育てるLDHの書籍」
- コラム「次代の課題に挑戦するLDHシンポジウム」

歯周病予防で世界に貢献！薬用ハミガキ・システマ

ライオン健康セミナーの歴史



創業者・小林富次郎

序章

事業を通して 社会に貢献する

～ ライオン創業物語 ～

ライオンの口腔保健活動は、創業者・小林富次郎の「世のため、人のために尽くしたい」という熱い想いから生まれました。本章では、小林富次郎の波乱に満ちた人生と、ライオンの社会貢献活動の原点についてご紹介します。

禍福は糾える縄の如し

時代の荒波を超えて

1852年(嘉永5年)、酒造業を営む小林家の四男として生まれた小林富次郎。生来の努力家であり、事業の才能にも恵まれながら、その人生は激動の時代に翻弄される苦難の連続だった。20歳を過ぎた頃、軍用資金調達に懸命になっていた江戸幕府からの多額の税金で家業は没落。裸一貫で上京し、当時まだ新しかった石鹼業界に身を投じ、一時は会社の支配人になるも、明治政府の財政改革による不況で倒産。その後、知人の会社で働きながらマッチ事業の将来性に目を付け、果敢に宮城県の上川沿いに工場を建設したが、1890年の大洪水ですべてを失った。さらに、マッチの軸木用に仕入れた大量の原木が洪水で下流に流され、橋や人家を破壊したと責められ絶望の淵に追い詰められる。失意の底で、いつそ川に身を投げようかと考えた富次郎だが、ふと頭に浮かんだ「鍛錬とは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものだが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせる」という聖書の一節に助けられる。それは洪水の2年前にキリスト教の牧師から授かったものであり、富次郎はこの言葉を胸に捲土重来を期した。



酒造業を営んでいた頃の小林家。中段左から3人目が富次郎。

小林富次郎商店の創業

「ライオン歯磨」の発売

1891年に現在の東京都千代田区に開業したライオングループの前身、小林富次郎商店。



大洪水の悲劇のあと、富次郎は、工場の再生に取り組んだが、心労で病に倒れ、やむなく妻とともに東京に戻った。すると、富次郎の困窮ぶりに、かつての知人から支援の申し出があり、石鹼の原料などの販売を始めることができた。また病の癒えぬ身も顧みず、熱心に営業に歩くと、幸い石鹼業界には知り合いも多く、富次郎にも十分な知識があったので商売は順調に伸び、ついに1891年（明治24年）に小林富次郎商店を開業するに至った。その後、事業拡大を模索するなか、当時、売れ始めていたハミガキに着目。すでに多くの競合商品があったが、今後、もつと多くの人がハミガキを使うようになれば、市場は何倍にも拡大すると考え新規参入を決断。専門知識が皆無であったため手探りのスタートになったが、専門書を読み漁り、知人の牧師から外国製ハミガキの製法を教えてもらい、寝食を忘れた懸命の努力の末、1896年にハミガキ第一号を発売。ドイツ製の原料と、英国製の香料を使用し、商品名は百獣の王ライオンから「獅子印ライオン歯磨」と命名。富次郎のアイデア溢れる宣伝や営業努力で、販売は年々増加の一途を辿った。

人は利欲のために生きるにあらず

算盤の聖者

1900年に発売された小林富次郎商店の「慈善券付きライオン歯磨袋入」。慈善券が袋の裏面に印刷されている。



39歳にして、ようやく成功を収めた小林富次郎だが、決して浮かれることはなく、ある牧師は、その姿を「算盤の聖者」と形容した。熱心な事業家である一方で、涙もろく、情に厚く、気の毒な孤児や老人に心からの優しさで接する富次郎は、孤児院に多額の寄付を行うなど、慈善活動に大変熱心だった。

そんな富次郎は、1900年、腸チフスで重篤に陥りながら、奇跡的に一命をとりとめると、「余生は神と人にと捧げて、社会の幸福に奉仕しよう」と心を固めた。しかし、真に社会に奉仕するには一個人の力では限界があることを孤児院への寄付で痛感していた富次郎は、多くの人々の善意を集め、社会貢献につなげる方法はないか想いをめぐらす。そして、ふと、新聞に掲載されていた米国の会社による慈善券発行の記事を思い出し、自社の製品に慈善券を付けて売り出すことを思いついた。

この画期的な慈善券の試みは、小林富次郎商店の名を一躍有名にすると同時に、「事業を通して社会に奉仕する」ライオンの社会貢献活動の原点となり、今日まで続く口腔保健活動を生むきっかけになった。

約70億円を全国の慈善施設へ

「慈善券付きライオン歯磨」の発売

慈善金による寄付を受けた岡山孤児院。院長は小林富次郎商店に深く感謝し、新たな施設を「ライオン館」と命名。その数は毎年増え、10棟にも達したという。



富次郎は、腸チフスの療養もそこそこに慈善券のアイデアを実行に移す。販売価格3銭（現在の価値で約600円）の「獅子印ライオン歯磨小袋入」に1厘分（現在の価値で約20円）の慈善券を付けた「慈善券付きライオン歯磨」を発売。購入者が慈善券を支援したい慈善施設に届けると、施設は慈善券の枚数に応じた寄付金を小林富次郎商店から受け取ることができるしくみだ。実際には、慈善券が利用されずに捨てられてしまうこともあったが、小林富次郎商店では、未回収の慈善券まで現金に換算し、全国の施設に配分した。

慈善券付き歯磨は、多くの称賛を集める一方で「売名行為だ」「寄付金の分だけ商品の品質を落としている」という批判もあった。そこで、製品の包装材料をコストダウンすることで慈善券の20円分を捻出したことを説明。さらに慈善券の発行が1900年（明治33年）から20年間にわたって続けられ、現在の価値で合計約70億円という巨額の寄付金が全国の孤児院・育児園などに届けられたことで、富次郎の善意を疑うものは誰一人いなくなった。

死して生命あり

引き継がれる創業の志

多くの人々に見送られる富次郎の葬列。その様子は映画フィルムに撮影され、現在、日本最古のオリジナルネガフィルムとして東京国立近代美術館で保存されている。



富次郎の慈善心は、慈善施設だけに向けられたわけではない。「慈愛済民」を志す富次郎は自社の従業員も非常に大切にしていた。当時の工場には、小学校しか出ていない者や未就学の女子工員が多かったため、嫁入り前の手習いとして普通教育と裁縫を習わせる夜学校を開校。さらに、若い工員たちを東京基督教青年会の夜学へ通わせ、英語教育も施した。こうした富次郎の計らいは、社員たちに大変喜ばれ、やむを得ぬ事情がない限り小林富次郎商店を辞める者はいなかったという。

そして、「慈善券付き歯磨」の販売から10年後の1910年。多くの人々に愛された小林富次郎は、創業の地、神田柳原の2階座敷で、家族と50人の店員に見守られながらこの世を去った。享年58歳。葬儀の行列は、全国の慈善施設から贈られた百以上の花輪を先頭に、富次郎の棺を載せた二頭立ての馬車が進み、別れを惜しむ人々の列が数百メートルにも及んだという。

人々の尊敬を集めた富次郎の深い慈善心は、二代目富次郎や残された従業員たちにしつかりと受け継がれ、後の口腔保健活動へと発展していった。

ライオンの
ユニークな宣伝活動 ①

広告は商品を育てる肥料である

● 日本初のCMソングを演奏

広告王と称される小林富次郎は、つねに斬新なアイデアで人々の注目を集める広告活動を展開した。1896年(明治29年)の「ライオン歯磨」発売時には、非常に珍しい楽隊パレードを敢行。「ライオン歯磨」のほりを立て、当時の流行歌を商品広告の替え歌にして演奏。地方では楽隊の演奏を初めて聞く人も多く、行く先々で黒山の人だかりができ、前へ進めなくなることもしばしばだったという。効果的な宣伝活動で「ライオン歯磨」は全国に知れ渡った。



● ハミガキを買って、大相撲を観に行こう

「ライオン歯磨」の発売3周年を記念して1900年には、歯磨大袋3個を買い求めた人を、両国の回向院大相撲に無料で招待するキャンペーンを実施。当日は回向院の隣接地に販売所を特設し、人気関取が交代で呼び入れの役を務めた。わずか大袋3個で当時人気のあつた常陸山、梅ヶ谷の相撲が見られるというので、入場者は2日間で約2万人の大盛況。販促企画として絶大な効果を発揮した。こうした大胆かつアイデアあふれる販促活動で、小林富次郎商店は着実に売上げを伸ばしていった。



100年変わらない、幸せへの願い。

初代・小林富次郎が創業した1891年は、約300年続いた江戸時代が終わり、日本が近代国家へと向かう大転換期にありました。新しい時代の中で多くの日本人が、「自分は何を成すべきか」「戸惑うなか、富次郎は、事業を通じた社会奉仕を志し、自らの道を果敢に歩み続けました。苦勞人であり、弱者の気持ちを知る富次郎だからこそ辿り着いた「社会の幸福に奉仕したい」という熱く清らかな想い。その崇高な精神は口腔保健活動を生み、100年を超えた今もライオンの社会奉仕活動の中に脈々と受け継がれているのです。



二代目・小林富次郎

第1章

慈善券に次ぐ 第二の社会貢献を

～ 口腔保健活動の幕開け ～

創業者・小林富次郎の遺志を継ぎ、二代目富次郎を中心として始まった、ライオンの口腔保健活動。企業の社会貢献として、他に類を見ないこの活動がどのように生まれたのか、当時の日本の時代背景を含めてご紹介します。

きつかけは食生活の大きな変化

楊枝から歯ブラシへ

日本では古来から、木製の楊枝などで歯の清掃を行う習慣があり、江戸時代に書かれた教育書にも「歯の清掃をすれば、老いても歯を失わない」と記されていた。しかし、明治時代に入ると、西洋文化が一気に流入し、日本人の食生活が大きく変化。従来は、冷たく、堅い物が多かった食卓に、温かく、柔らかく、甘い食べ物が並ぶようになり、むし歯に悩む者が次第に増えていった。

こうした状況に対して、最初に行動を起こしたのは、西洋医学を学んだ歯科医師たちだ。ある者は、米国の口腔衛生パンフレットを翻訳して出版し、またある者は、独自に学校などへ出向き、むし歯予防の指導を行った。しかし、当時の歯科医師は今日のように社会的身分が確立されていなかったため、大きな影響力を及ぼすことはできなかった。小林富次郎商店が創業した1890年代には、かつての楊枝に代わり、歯ブラシと歯磨き粉が一般家庭に普及し始めたが、口腔衛生についての知識は乏しく、歯磨きの方法も各人各様。政府や行政も含め、口腔衛生思想の普及に組織的に取り組む者はまだいなかった。



当時の歯みがき用の楊枝。先端がブラシ状に加工されている。



それは、講演会から始まった

第1回「ライオン講演会」開催

1913年、東京基督教青年会館で
開催された第1回ライオン講演会。



口腔衛生思想の普及に向け、いち早く行動を起こしたのは、亡き富次郎の遺志を継いだ小林商店だった。まず「ライオン歯磨」の愛用者向けのイベントで、口腔衛生の講演や、歯磨きの方法などを紹介したパンフレットを配布。しかし、効果は限定的であり、慈善券付き歯磨きのような大きなインパクトを与えることができなかった。もつと多くの人々に口腔衛生の大切さを伝える手段はないか。そんな社会奉仕への熱い想いの中から生まれたのが「ライオン講演会」だ。これは、社会的関心の高い話題について複数の著名人に講演を行ってもらい、同時に、口腔衛生についての講演も行い、その啓発をしようとするものだ。しかし、当時、一企業がこのような講演会を行う例はほとんどなかったためセールスを目的とした催しではないかと誤解される恐れや、口腔衛生に関心をもつ人はまだ少ないため、人が集まるのかという懸念もあった。しかし、二代目富次郎は「口腔衛生への関心を高めることは、国民の健康向上につながるものであり、とくに、次世代を担う子どもたちの健康に大きく貢献できる」という強い信念から、計画を推進した。



ライオン講演会を支えた緑川宗作。
口腔衛生の指導ができる専門家が少
ない時代、小学校で口腔衛生の指導を
していた緑川は二代目富次郎と意気投
合し、講演活動の専任講師を務めた。

海を越え、中国、台湾でも開催

講演会の運営は、歯科開業医から小林商店に転じた緑川宗作とライオン講演会理事の井上胤文いのうえたねふみが獅子奮迅の活躍をみせた。なるべく多くの人々に参加してもらえよう、音楽演奏なども取り入れたプログラムを練り、満を持して1913年(大正2年)に「第一回ライオン講演会」を東京で開催。十分な準備が奏功し、予想以上に集まった聴衆に大きな感銘を与えることができた。これに自信をつけ、翌年からは、全国各地での巡回講演をスタート。初年度の開催数はなんと175回にも及んだ。講演会の内容も、活動写真の上映会も加えるなど回を追うごとに充実。開催場所も、当初は、市内の集会場などで一般大衆を対象に行っていたが、やがて小学校、女学校、中学校、各種中等学校をはじめ、青年団、軍隊、工場などでも行われるようになり、いには海を越え、樺太、台湾、朝鮮、満州にまで活動の範囲を拡大した。緑川宗作は当時の心境を「静かな池に石を投げると、小さな水の輪が次第に大きく広がっていく、私はその小石になりたい」と綴った。

「ライオン講演会」は、1933年まで約20年間の長きにわたって開催され、総開催回数は実に10万9078回、聴講人員はのべ5771万名にも及んだ。

歯科医師会による口腔保健活動

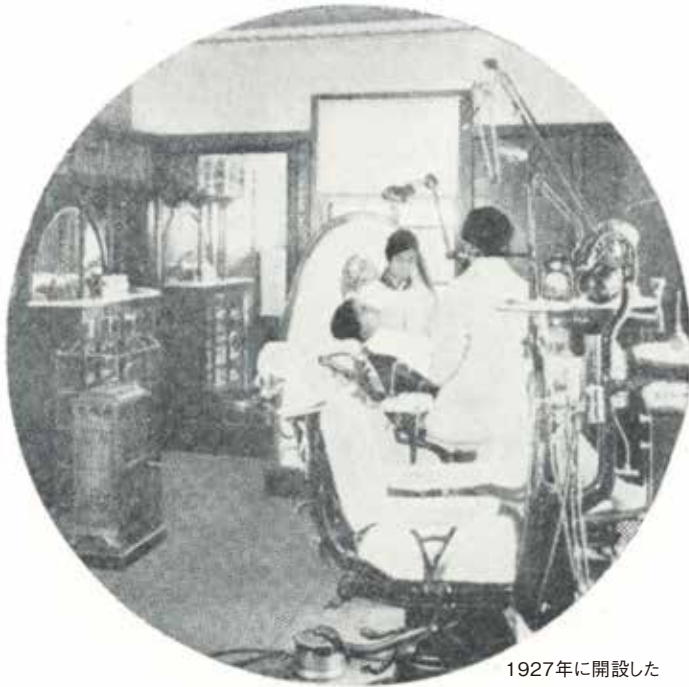
二代目・富次郎の寄付で活動を本格化

この時期に口腔保健活動を始めたのは、小林商店だけではない。歯科医師の全国組織である日本聯合歯科医会（現在の日本歯科医師会）も、口腔衛生思想の普及に意欲を燃やし、「第一回ライオン講演会」が開催された同じ年に、「歯の衛生」という小冊子を発行。全国の歯科医師を通して、中学生や高等女学校の生徒、小学校の教師などに配布し、大いに活用された。しかし、日本聯合歯科医会は予算に限りがあり、十分な活動ができずにいるところ、二代目・小林富次郎が年間30000円（現在の価値で約6000万円）を寄付。早速これを活用し、口腔衛生知識の普及に必要な、標本、模型、図表、映画などを制作し全国各地で、歯科衛生博覧会や講演会を開催。本格的な活動を開始した。

二代目・富次郎の寄付は、日本聯合歯科医会の年間予算の倍以上という巨額なものであったが、日本国民に口腔衛生思想を普及させるには、歯科医師の力が重要だと考えた富次郎は、その後も毎年寄付を続け、歯科医会の口腔保健活動をバックアップ。その額は7年間で合計約1万円（現在の価値で約2億円）にも達した。

受け継がれた、社会奉仕の志。

今でこそ、企業の社会貢献活動は、あたり前のように行われているが、100年前に、日本でこのような活動をしていた企業はほとんど存在しない。「慈善券付き歯磨」は購入代金の一部を寄付金としたものだが、「ライオン講演会」は、聴衆から料金を徴収することなく、開催に関わる費用はすべて小林商店が捻出。さらに富次郎は、歯科医会へも寄付を行うなど、経済的な負担は決して軽くなかった。しかし、人々の幸福に尽くしたいと願う創業の志が、全社一丸となった熱い活動を推し進めていた。



1927年に開設した
ライオン・デンタルセンター

第2章

歯科診療の 発展に貢献する

～ 歯科診療活動 ～

小林商店は、「ライオン講演会」などを通して口腔衛生思想の普及に務めるとともに、歯科診療活動にも進出。国内初の児童向けの歯科診療所の開設や、予防歯科の普及など、日本の歯科治療の発展に大きく貢献しています。

日本の近代歯科医療の幕開け

外国人歯科医師に学んだ最新医療

1860年、日本に初めて渡航してきた米国人歯科医師W・C・イーストレキ。横浜での開業時に、長谷川保兵衛が助手を務め、後に歯科医師となった。



「東京歯科医師会100周年史」東京
歯科医師会発行より転載

小林富次郎商店が「ライオン歯磨」を発売した1890年代、日本の歯科診療は、近代化へ向けた黎明期にあった。それまで、日本での歯科治療は、漢方医の中で口内の治療を行う者や拔牙を専業としていた歯抜師、義歯を製作していた入歯師などによって支えられていたが、江戸時代の末期に海外との交易が始まると、欧米の歯科医師が次々と来日。横浜などで居留する外国人を相手に開業し、次第に日本人の治療も行うようになった。また、その技術を習得するために、弟子入りする日本人も出てきた。国の近代化を急いでいた明治政府は、こうした先進的な西洋医学をいち早く取り入れようと、1875年(明治8年)に西洋医学を基本とした医術開業試験を開始。外国人医師に師事した小幡英之助おばたえいのすけが日本人初の歯科医師となった。その後、歯科医師数は徐々に増え、初の全国組織である大日本歯科医会(現在の日本歯科医師会)が設立された1903年には、394人。さらに1907年には1913名と大きく増加し、全国のほとんどの主要都市には歯科診療所が開設されるようになった。

日本に児童専用の歯科医院を

「ライオン児童歯科院」の開設

各地で歯科診療所が次々と開設されるなか、ライオンの歯科診療活動の第一歩となったのは、国内初の児童専門歯科医院の開設だった。きっかけは、米国に視察に出かけた小林商店の重役・神谷市太郎が、ボストンのフォーサイス児童歯科治療院やニューヨークのロチェスター歯科診療院など、米国の児童専門の歯科診療所に深い感銘を受けたことにある。「日本にもこのような施設を作りたい」。社内には時期尚早との声もあったが、神谷の熱意によって1921年（大正10年）「ライオン児童歯科院」の開設が発表された。しかし、思わぬことに、周辺地域の歯科医師会から反対の声が上がってしまう。当時は、第一次大戦の戦後恐慌下であり、経営に苦しむ開業医が多かった。さらに、企業による職域実費診療所も増え始め、開業医たちはこのような歯科院の増加に危機感を募らせていた。そこで神谷は、ライオン講演会を担当していた緑川宗作とともに開業医を説得してまわる。歯科院の目的は「子供の歯の清掃とむし歯予防」であり社会貢献の一環であることを粘り強く訴え続け、ようやく3ヵ月後に診療を始めることができた。



東京京橋区山城6番地（現在の中央区銀座）に開設された「ライオン児童歯科院」。

12年間で約54万人の児童を診療

「ライオン児童歯科院」の初代院長には、当時小林商店に籍を置き、後に学校

おかもと きよよぶ

歯科活動の普及などに活躍する岡本清纒が就任。合計3名の歯科医師によって1921年に診療をスタートした。児童専門の歯科医院にふさわしく、治療椅子は児童の体に合わせた専用椅子をわざわざ輸入して設置。後にレントゲン装置も導入するなど設備を徐々に充実させ、専門の歯科医師も増員。開設当初は、1日の患者数は45名程度だったが、1年後には約120名に増加するなど年を追うごとに信頼を深め、1933年までの12年間でのべ約54万人の児童を診療した。

関東大震災の救援活動

1923年9月1日、東京を襲った大地震は「ライオン児童歯科院」にも甚大な被害を与えた。歯科院は、屋上に翻っていたシンボル旗もろとも焼け落ちる惨状となったが、スタッフの総意で、自らの復興より市民の救援活動を優先。急遽、歯科救護班3班を組織し、東京市内3カ所で1カ月間、無料歯科診療所を開設した。テント張りの簡易な施設でありながら、約7200名の被災者を診療し人々に安心を届けた。



関東大震災時に、「ライオン児童歯科院」が開設した臨時の無料歯科診療所。

日本初「口腔衛生婦」の育成

国の施策を20年も先行

口腔衛生婦も活躍する「ライオン児童
歯科院」の治療のようす。



「ライオン児童歯科院」は、院内で診療を行うだけでなく、口腔保健活動の新たな拠点としても大きな役割を果たした。学校教職員への指導や巡回診療、ライオン子供大会などその活動は多岐にわたる。また日本で初めて、現在の歯科衛生士にあたる口腔衛生婦の育成を行ったのも「ライオン児童歯科院」の偉業のひとつ。当時の米国では、口腔衛生婦が「準歯科医」として活躍していたことから、いずれ日本でもそのような人材が必要になると予想し、解剖学、病理学、看護学などの専門授業を行う養成コースを開設。1922年(大正11年)から1938年までに29名の口腔衛生婦を世に送り出すことができた。これは1949年に、国が歯科衛生士の養成を開始する実に20年以上も前のことだった。

大女優 山本安英が口腔衛生婦として活躍



1922年、歌舞伎俳優二代目市川左團次主宰の「現代劇女優養成所」に所属していた山本安英は、舞台稽古をしながらライオン児童歯科院で口腔衛生婦として活躍。その後、戯曲「夕鶴」で文部大臣賞を受けるなど本格的な舞台女優として羽ばたいていった。

ひろがる、民間企業の活動

クラブコスメチックスによる口腔保健活動

大阪市に開設された中山太陽堂・口腔衛生研究所の診療室。



「クラブコスメチックス100年史・百花繚乱」(株)クラブコスメチックス発行より転載。

大正時代の後期になると、口腔保健活動の輪は、次第に他のハミガキメーカーにも広がっていった。なかでも「クラブ歯磨」を発売していた中山太陽堂(現・(株)クラブコスメチックス)は、1923年に中山文化研究所内に口腔衛生研究所を設立し、多彩な活動を展開。子どもたちを対象にした歯磨き奨励活動を主体に、全国各地で学校巡回歯科診療を実施したほか、会社事務所や工場、軍隊などを訪問し、口腔衛生に関する講演や映画上映を行った。さらに、1927年頃からは、歯科診療の器具を備え付けた自動車で、全国の学校を巡回するクラブ自動車歯科診療班の活動も開始している。

また、歯科医療の仕事に就きたいと考える女性のために、歯科医学と口腔衛生に関する知識と技術の指導を行ったほか、中山太陽堂の本社があった大阪では、歯科診療所も開設。保存歯科、口腔外科、小児歯科、X光線科も備えた総合歯科医院として活動を行っていた。中山文化研究所は、1954年に閉鎖されたが、その活動は、日本の口腔保健活動の歴史に確かな足跡を残している。

時代を先取る予防歯科のはじまり

「ライオン・デンタルセンター」開設

1927年に四谷に移転した「ライオン
児童歯科院」。



関東大震災の後、「ライオン児童歯科院」は、1927年(昭和2年)に四谷区四谷見附へ移転。設備を一層充実させ、設立当初の夢であった治療科、充填科、矯正科、X線科という児童歯科診療のすべてをカバーできる診療体制を整えることができた。また、口腔衛生思想のさらなる普及をめざして、指導機関である「ライオン・デンタルセンター」を院内に開設。歯周病予防のための口腔清掃や歯石除去の普及に力を注いだ。これが、現在大きなトレンドになっている予防歯科活動の始まりであり、2013年に東京駅にオープンした「グラントウキョウオーラルヘルスケアステーション」につながる源流でもある。

「ライオン歯科衛生研究所」設立

「ライオン児童歯科院」は、その後、第二次世界大戦による物資不足により、やむを得ず活動を停止。その役割は、1964年に誕生した(財)ライオン歯科衛生研究所へ受け継がれた。

世界をリードする歯科センターへ

新宿・京王百貨店内にオープンした「ライオン・ファミリー歯科診療所」。



「(財)ライオン歯科衛生研究所」は、非営利で口腔衛生に関する研究を行う研究部、各種団体への健康指導などを行う事業部、子ども専門の診療・相談を行う診療部から構成され、1964年には、活動の一環として新宿の京王百貨店に「ライオン・ファミリー歯科診療所」を開設した。歯科医15名、歯科衛生士15名をはじめとする充実したスタッフ陣と、最新鋭の診察台10台を備えた「ライオン・ファミリー歯科診療所」は、開設とともに連日大盛況となり、所員たちはあまりの忙しさにうれしい悲鳴を上げた。来所者の中には、1921年に開設された初代「ライオン児童歯科院」で治療を受けた老人が、孫の手を引いてやって来る光景が見られるなど、ライオンの児童歯科診療が、社会に深く浸透していることを物語るエピソードも伝えられている。

また当時、予防・診療と研究活動を兼ね備えた施設は「ライオン・ファミリー歯科診療所」を含めて、世界にわずか4カ所しかなく、さらに1966年には、5番目の施設として名古屋に「ライオン・ファミリー歯科診療所」が誕生。ライオンの歯科診療所は、日本国内のみならず世界をリードする施設でもあった。

さらに進化する歯科診療活動

歯科専門家の資質向上にも貢献

その後も、ライオンの歯科診療活動は進化を続け、1971年(昭和46年)には子どものむし歯予防に特化した「大阪ライオン・ファミリーコーナー」を現・ライオン(株)大阪オフィスの1階に開設。現在では成人も対象にした豊富な診療メニューを揃え、子どもから高齢者まで家族一緒に通える「大阪予防歯科ステーション」へと発展している。



最先端のオーダーメイド診療を行う「東京デンタルクリニック」。

また、「ライオン・ファミリー歯科診療所」は、新宿・京王百貨店から目黒に移転した後、2014年に「東京デンタルクリニック」に改称して五反田駅前に移転。車椅子で入れる「ケアルーム」や、血圧・心電図などをモニターしながら治療が受けられる「モニタリングルーム」など、最新設備を完備。一人ひとりのむし歯や歯周病になる危険度を調べて治療や予防を行うオーダーメイドの診療「リスクコントロール・デンティストリー」も開始した。さらに、歯科専門家向けの各種セミナーを積極的に開催し、歯科専門家の資質向上や技術向上にも貢献するなど、歯科診療の進化へ向けた挑戦を続けている。

お口の健康はライオンが守る。

企業が社会貢献活動の中で、本来の事業領域を超えて、医療分野にまで進出するケースはほとんど例がありません。ライオンは、それをいまから約100年前に行い、しかも日本初の児童専門歯科院を開設するという快挙を成し遂げました。人々の幸福に奉仕しようと願う先人たちの高い志と、未知の分野へも果敢に挑戦する勇気が、日本の歯科医療をリードし、多くの人々の歯と健康を支えてきたのです。

★ ★
★ ★
★ ★
★ ★
★ ★
★ ★
★ ★
★ ★
★ ★
★ ★

朝と
ねるまへの
良い習慣

あさ
よ
しふくわん



童画家の河目悌二による
「朝と寝る前の歯磨き」を呼びかけるチラシ

第3章

子どもたちを むし歯から守る

～ 学童向け口腔保健活動 ～

第2章で紹介した歯科診療活動と同時期にスタートした学童向けの口腔保健活動。子どもたちに正しい歯みがき習慣を身に付けてもらうため、「学童歯みがき大会」を中心に、日本各地で行われた多彩な活動をご紹介します。

児童のむし歯保有率96%

小学校教職員向けの講習会も開催

小学校教職員向けの講習会。定員を200名とし、4日間にわたって密度の濃い講習が行われた。



明治以降の急速な食生活の変化で、最も影響を受けたのは子どもたちだった。温かくて柔らかく、甘い食べ物が増えたことで明治後期には、児童のむし歯保有率がなんと96%に達し、重度のむし歯に苦しむ子どもも少なくなかった。「このままでは、むし歯で国が減びてしまう」。強烈な危機感が、小林商店を児童向けの口腔衛生活動へと駆り立てた。

まず、1913年(大正2年)から始めていた「ライオン講演会」を全国の小中学校へも拡大。子どもたちに歯みがきの大切さをわかりやすく伝えていった。さらに、指導者への教育も必要だと考え、1918年から全国の小学校教職員向けの口腔衛生講習会を東京で開催。地方からの参加を促すため、小林商店が東京までの旅費の半額を負担するという破格の待遇であったため、毎回多数の教職員が参加した。講習会は、関東大震災によって中止された1923年まで毎年行われ、その後の学校歯科の発展に大きく貢献することにもなった。

子どもたちに楽しい歯みがき習慣を

● 多彩な付録で魅了する「ライオンコードモハミガキ」

当時のハミガキには大人用の刺激の強い物しかなかったため、小林商店は、歯牙も未完成な幼児に効果的な薬剤を配合し、色や香味も子どもたちの好みに合わせて「ライオンコードモハミガキ」を開発。さらに、子どもたちに、楽しみながら歯磨きの習慣をつけてもらえるようにデザインを工夫し、絵本やしおりなどの付録を付けて1913年（大正2年）に販売開始した。作画は、当時活躍していた日本画の巨匠、鏑木清方（※1）や、子ども向け雑誌などで活躍した童画家、武井武雄（※2）らに依頼。歯みがきへの関心を高めるとともに子どもへの情操教育にも役立つと高い評価を得た。

※1 鏑木清方（1878―1972年）

美人画が有名な近代日本画家の巨匠。1954年に文化勲章受賞。

※2 武井武雄（1894―1983年）

「子どもの心にかれる絵」の創造をめざして、童心を巧みに表現した画風で独自の世界観を作り上げた。



10年間・2万校・2600万人

「歯磨教練」で正しいみがき方を指導

大正時代の「歯磨教練」のようす。
1910年代に米国で行われていた
「Toothbrush Drill」と呼ばれる
歯みがき指導を手本にしている。



子どもたちに正しい歯みがき方法を覚えてもらうには、実際に練習するのが一番。そんなアイデアから生まれたのが1922年から始まった「歯磨教練」だ。教練という名の通り、小学校などで子どもたち全員が歯ブラシを持ち、号令に合わせて体操のように歯みがきを練習する。当時は、歯のみがき方もまちまちだったので、上・下・縦に使用する正しいみがき方を指導した。

さらに1925年からは「全国学校歯磨教練」と名称を変え、全国的かつ組織的な活動へと拡大。その後も各地で精力的に活動が行われ、1935年までの約10年間に、約2万校の小学校で実施し、参加した児童総数はのべ約2600万人に達した。小学校から寄せられた報告を見ると「自発的に歯をみがくようになった」「歯みがきだけでなく、身辺を清潔にする習慣が身に付いた」「今回の運動をきっかけに校内に歯をみがける洗面所を設けた」などの声が多数あり、「歯磨教練」が、子どもたちの口腔衛生の向上に大きな効果をあげたことがわかる。

子どもたちの心を掴むユニークな活動

ライオン歯磨児童劇団

「歯磨教練」は幼い頃から歯みがきの習慣を付けるのに役立った。

大正時代から昭和の初めにかけて、小林商店では子どもたちに歯みがきの大切さを理解してもらうためにユニークな企画を立て、全国各地で多彩な啓発活動を展開した。

1924年（大正13年）にはライオン歯磨児童劇団を結成。口腔衛生をテーマにした「歯の国ものがたり」「ライオン・デンタル・レビュー」など、芸術性豊かな演劇を公演。大阪市の天王寺公会堂を皮切りに、東京市（現在の東京都）をはじめ全国各地で数十回の公演を行い、子どもたちにむし歯予防の大切さを伝えた。

健歯所持者の表彰

また、1926年には関西地区で小学校児童口腔診査会を開催。小学生の歯の診査を行い、優良歯牙の所持者1500人を選抜表彰した。この試みは関係者から高い関心を集め、やがて東京市をはじめ全国各地都市で歯科医師を中心とした独自の口腔診査会が行われるようになった。



国による初の口腔保健活動

むし歯デーと学校歯科医令

1932年、日比谷公園音楽堂で行われた「第1回学童歯磨教練体育大会」。



日本で初めて、行政による口腔保健活動が行われたのは、「ライオン講演会」から7年後の1920年のこと。内務省(現在の総務省、警察庁、国土交通省、厚生労働省)は、当時の児童の三大疾患であった結核、トラホーム、むし歯をテーマにした「児童衛生博覧会」を東京で開催。その中で、11月5日を「むし歯デー」と定め、むし歯予防思想の普及を図るキャンペーンを展開した。小林商店や歯科医師会もこれに積極的に協賛して、街頭でのPR活動やビラ配布を行いキャンペーンを大いに盛り上げた。また、1931年には、むし歯予防などを指導する学校歯科医の設置を推奨する「学校歯科医令」が公布されるなど、国も口腔保健活動を積極的に推進するようになった。

その後、「むし歯デー」は、日本歯科医師会が主催し、内務省、文部省(現在の文部科学省)が支援する「むし歯予防デー」(6月4日)となり、地方の行政団体からの支援も広がり、年々規模を拡大していった。小林商店も、毎年「むし歯予防デー」に協賛してさまざまな活動を展開し、例年にも増して盛大な催しとなった1932年には、「むし歯予防デー」に合わせる形で「第1回学童歯磨教練体育大会」を東京と大阪で同時開催した。

戦時下も続く歯磨教練体育大会

戦時下にもかかわらず後樂園スタジアムに
1万人の学童が集った「第9回学童歯磨
教練体育大会」



「第1回学童歯磨教練体育大会」は、東京では日比谷公園音楽堂前におよそ30校1万名、大阪では天王寺公園におよそ40校1万5000名の児童が参加。手に手に歯ブラシをもち、号令に合わせて一斉に歯磨教練を行うようすは、さながら華麗なマスケームのような大迫力となり、大成功となった。その後、日中戦争が始まり、世の中に戦時色が濃くなってきたも「学童歯磨教練体育大会」は、毎年継続的に開催された。とくに、1937年(昭和12年)の第6回は、「むし歯予防デー」10周年であったため、戦時下にも関わらず、小林商店・口腔衛生部と、学校歯科医、学校教職員が数カ月前から入念な準備を重ね、同年6月5日、東京・隅田公園に学童8000人を集めた整然たる大会を開催した。

また、太平洋戦争開戦の前年である1940年は、紀元2600年と小林商店の創業50周年が重なったため、その記念行事として、東京のほか名古屋市(参加児童数4500人)、静岡市(2600人)、金沢市(1万人)、桑名市(2000人)でも「歯磨教練体育大会」を敢行。東京大会は、後樂園スタジアムにおいて1万人の学童が参加したが、その後、戦局の悪化により12年間中断されることになった。

焼け野原からの再出発

GHQによる歯科衛生対策

空爆により焼失した本社と東京工場。終戦の翌月には50名を新規採用し、再建が始まった。



1945年8月15日、長く悲惨な戦争は、日本全国に深い傷跡を残し、ようやく終わりを告げた。小林商店も本社や各地の営業所、工場を焼失し、多くの海外拠点も失った。小林喜一社長は、一日も早く本来の姿を取り戻すべく、まずは従業員たちをねぎらいをもって迎え入れ、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の統制による不自由な事業環境の中で再生へ向けた懸命な努力を始めた。

一方、GHQは、戦争によって悪化していた日本の衛生状態の改善に乗り出し、コレラやチフス、結核などと並んで、子どもたちの歯科衛生についても対策を指示。これを受けて文部省は、1946年、都道府県ごとに歯科医師と看護婦による学校巡回班を組織し、全ての学校で全児童の歯科診察を行うという、日本の公衆衛生史上でも最大級の活動を展開した。戦時中は学校歯科医による診察もほとんど行われていなかったため、学校巡回班の活動により、戦後日本の口腔保健活動は息を吹き返すことになった。また、診療の中で、米国から導入されたばかりのフッ化物局所塗布も行われ、その普及に大きな役割を果たした。

復興の街に笑顔を届ける

口腔保健活動を人々の憩いの場に

終戦から3年を経て、復興への道筋が見え始めた小林商店は、1949年(昭和24年)、社名を「ライオン歯磨(株)」に一新。新たな成長への決意を内外に示すとともに、自らの使命である口腔保健活動にも再び力を入れ始めた。

暮らしに落ち着きが戻ったとはいえ、娯楽や文化施設の少ない時代。口腔保健活動の専任部署となった文化部の向井喜男部長は、「生活に潤いをもたらし、文化のオアシスになるような口腔保健活動を行いたい」と考え、講演会とともに映画会やレコードコンサート、移動動物園、子どもサンデースクールなど、さまざまな活動を展開し、各地で大盛況となった。移動動物園では、派手な装飾を施したトラック5台に、ライオン、ピューマ、ヒョウ、クマ、サル、鳥類などを乗せて全国を巡回。口腔衛生の啓発を図るとともにサルの曲芸、童話の朗読、歌謡ショー、夜の映画上映など盛りだくさんの内容で人々を魅了した。また、子どもサンデースクールは、各地の教育委員会との後援・共催で、著名人の講演や映画上映会などを開催。どの会場も児童と父母で満員になるほどの盛況となった。



1950〜51年にかけて行われた移動動物園。

動く診療所「ライオン・ヘルスカー」登場

1952年4月、東京工場での盛大な披露式で、社員たちの拍手と歓声に包まれたのが戦後の口腔保健活動のシンボルとも言える「ライオン・ヘルスカー」だ。そのデザインは、「ライオン煉歯磨」のデザインを模し、屋上には歯をみがく動物人形を設置したユニークなもの。全長8・3m、幅2・45m、高さ3・1mの大きな車内には、口腔保健活動に用いる展示用のパネルや映写機を備えたほか、児童歯科診療に必要なすべての設備を搭載していた。この「ライオン・ヘルスカー」は各地で大人気を博し、毎日、小・中学校2校を訪問し、講演、診療、映画上映を行うほか、販売店を回って販促活動にも協力。さらに夜は、公園などで野外映写会を開催するというハードスケジュールをこなしていた。スタッフは、まだ舗装もされていないでこぼこ道を走りながら車内で昼食をとる忙しさだったが、「そんな苦労を苦労と思わなかったのは、小・中学校や店頭で、多大な歓迎を受けたから」と、体験者は語っている。「ライオン・ヘルスカー」は3号まで製作され、日本全国を津々浦々まで巡回した。



テレビも無かった時代、子どもたちから熱狂的な歓迎を受けた。



待ちわびた学童歯みがき大会の復活

「第10回学童歯磨訓練大会」

現在の国立競技場の前身である外苑競技場で復活した学童歯磨訓練大会。従来の名称の「教練」は軍隊用語であることからGHQの指導で「訓練」へと変更された。



戦争の影響で1941年(昭和16年)から中断していたライオン歯磨(株)の「学童歯磨訓練体育大会」も、1953年、ついに感激の再開を果たした。高らかなファンファーレを合図に代々木の外苑競技場に1万2000人の児童が華々しく入場行進を行い、スタンドは約2万人の見学児童で埋め尽くされた。そして、楽団の演奏に合わせて全員が歯磨訓練を行う光景が13年振りに蘇った。「歯磨体操」に続いて行われた「レクリエーション」の部では、警視庁音楽隊による吹奏楽演奏をはじめ、米国極東空軍のヘリコプターによる飛行実演が披露されるなど、娯楽の乏しい時代にあつて、子どもたちの記憶に残る大会となった。その後も大会は、時代に合わせて内容を変えながら継続し、現在も「学童歯みがき大会」として毎年開催されている。約100年前、9割を超えていた児童のむし歯保有率も、2014年には、12歳児のむし歯経験歯数の平均が1.00本と大幅に減少。この進歩に「学童歯みがき大会」を中心としたライオンの活動が貢献していることは紛れも無い事実である。

快適な暮らしは、毎日の「よい習慣」から。

学童向けの口腔保健活動は、正しい歯みがき習慣の普及が第一のテーマでした。幼い頃から正しい習慣を身に付けることは、将来の健康につながる大切なことです。

歯みがきに限らず、健康で快適な暮らしは、毎日の「よい習慣」の積み重ねから生まれます。「よい習慣」を提案し、定着させることは、健康快適生活産業を標榜する現在のライオンにとっても重大な使命です。先人たちが、工夫を凝らして子どもたちに歯みがき習慣を浸透させたように、ライオンはこれからも、日々努力を重ね、世界の人々の健康で快適な生活習慣づくりに貢献していきます。



産業歯科予防管理活動
発足会の様子 (P51 参照)

第4章

母子へ職場へ社会へ、 ひろがる活動

～ 成人向け口腔保健活動 ～

学童向けを中心に始まった口腔保健活動は、1920年代に入ると子どもから母親へ、職場の女性へ、さらに一般成人へと活動の範囲を一気に拡大。多彩なアイデアで、さまざまな場で行われた活動を紹介しましょう。

人気を集める衛生博覧会

人々を驚かせた斬新なアイデア

京都で行われた衛生博覧会のようす
(右と、大いに話題を呼んだ「工場化せる
人体模型」(左)。



家庭の主婦や一般女性を対象にした口腔保健活動が本格的に始まったのは、学童歯磨教練が全国に広まった1920年代のこと。この時代は、病気や健康の知識を写真や標本で見せる「衛生博覧会」が各地で人気を博していたため、小林商店でも人々の関心を集める知恵を絞って、ユニークな展覧会を開催した。1927年(昭和2年)には、「歯に関する趣味の展覧会」と題して、古い医学書や文学から伝説、迷信、風俗に至るまで、歯に関する古今のあらゆる文献・図画を一堂に集めた企画展を東京の丸菱呉服店で開催。全国から苦勞して収集した多数の展示物は文化芸術的にも価値が高いものばかりで、入場者数は、大阪、名古屋、京都での開催も含め10万人に及ぶ大成功となった。このとき集められた資料文献は、後日「よはひ草」全6巻として編集・発行され貴重な資料になっている。また、1929年に開催された「母と子のための展覧会」では、当時の金額で数千円の巨費を投じて製作した電動の「工場化せる人体模型」を展示。内臓の機能などをわかりやすく解説する斬新なアイデアが大好評となり、その後全国で巡回展示された。

盛り上がる戦後の口腔保健活動

母と子のよい歯のコンクール

「第1回母と子のよい歯のコンクール」のポスター（右）と、第1回1位入賞の高松昌子さん、秀夫君（左）。



戦後、日本の口腔保健活動は、GHQの公衆衛生政策によって再び活況を取り戻す。そのなかで、新たにスタートを切ったのが、母と子を対象とした口腔保健活動だ。1949年（昭和24年）の児童福祉法の改正で、初めて乳幼児の歯科検診が行われると、「子どもの歯を健康に保つには、まず母親の理解が欠かせない」との機運が高まり、厚生省（現在の厚生労働省）と日本歯科医師会などが1952年から「母と子のよい歯のコンクール」を開催。ライオン歯磨（株）も口腔保健活動の一環としてコンクールを協賛した。

「母と子のよい歯のコンクール」は、各地区の歯科医師会がよい歯の母と子を選び、地域ごとの選抜会を経て、最終選考で入賞者を決定。大会が全国規模に拡大した1953年の第2回大会では、厚生大臣（現在の厚生労働大臣）を迎えて表彰式を行い、その後、東京・日比谷公会堂で盛大な歓迎会を開催。第1位入賞者の育児体験談の発表や著名人の講演、ゲーム大会、映画上映が行われ、都内女子高校生、各種婦人団体で埋めつくされた会場は、楽しい笑い声に満ちあふれた。

海水浴場にデンタルセンター出現

さらに、テレビ放送が始まり、高度経済成長長期に突入した1953年。ライオン歯磨(株)は、口腔保健活動の質をさらに高めるため、担当部署であった文化部の人員を増強し口腔衛生部へと格上げ。従来の内務課、歯科衛生課に加えて、文化・教育課を新設し、口腔衛生に関わる広報・教育活動から臨床指導まで幅広い活動を一貫して行える体制を整えた。そして、好景気による時代の追い風も受けて、今までに無かった新しい活動を精力的に展開した。

とくに注目されるのが、1953年に鎌倉・由比ヶ浜にオープンした夏期デンタルセンター「ライオン歯の美容室」だ。今では想像しにくい光景だが、海水浴客に対して歯の健診やクリーニングを行い大好評を博したという。そのため翌年からは日本歯科衛生士会が主催し、ライオン歯磨(株)と神奈川県歯科医師会が協賛する夏の定例行事となった。とくに、無料の歯磨洗口場が人気で1957年の記録によると1日平均2580人が利用し、のべ利用者数は7万5000人に達している。また関西の一大リゾート地であった大阪・浜寺海水浴場にも夏期限定のヘルスセンターを開設。海岸に「スーパライオン」のチューブを模した巨大なタワーを建設し、大きな話題になった。

由比ヶ浜に登場した「ライオン歯の美容室」(右)は、デザインも凝った造り。浜寺海水浴場では、スーパライオンタワーの下に人気の歯磨洗口場が設置された(左)。



たんぼぼのように強く美しく

母子歯科保健活動「たんぼぼ運動」の始まり

団地での巡回指導のようす。「たんぼぼ号」は2台の衛生指導車と1台の電源車で活動するように設計され、それぞれ「フラワー号」「スカイ号」「フルーツ号」と名付けられた。



さらに1950～60年代に入ると、今日まで続くライオンの口腔保健活動の柱である、母子歯科保健活動と産業歯科保健活動が相次いで萌芽する。まず、1959年(昭和34年)には、ライオン独自の母子歯科保健活動「たんぼぼ運動」が本格的にスタート。その名称には、美しく、逞しいたんぼぼのように健康な歯を保って欲しいというライオンの熱い思いが込められ、たんぼぼの綿毛が風に乗って広がるように全国へ運動を拡大。団地や市町村の保健センターなどで親子を対象にした歯みがき指導や、歯の健康相談、歯へのフッ素塗布が行われた。また、1974年には運動強化のため大型の口腔衛生普及車「たんぼぼ号」を投入。1日に母子750組の指導ができる「たんぼぼ号」によつて運動は一気にスケールアップし、東京のある団地では、子どもがいる世帯のほとんどが「たんぼぼ号」に乗車するなど、人々の歯の健康に大きく貢献した。

また、1986年には12年間活躍した「たんぼぼ号」に替わつて「ドリーム号」が登場。最新鋭の設備機器で活動をさらにダイナミックに展開していった。

大好評、職場での歯科相談

働く女性のための「さくらんぼ運動」

「さくらんぼ運動」には、さくらんぼのようなはちきれそうな健康を保って欲しいという願いが込められていた。



「たんぼぼ運動」に続いて1961年には、日本初の職域での口腔保健活動「さくらんぼ運動」が始まった。対象は働くすべての人々だが、とくに、これから母親になる若い女性に対して、早期に口腔衛生の意識を向上させることに力点が置かれた。活動は大阪支店で関西電力(株)の営業所巡回からスタートし、検診、歯科相談、スクーリング(歯石除去)などを実施したところ、1日平均130人の受診者があり、8営業所で合計1040人が受診するなど予想外の大好評となった。また、名古屋支店でも三井銀行を皮切りに各社の巡回を始めるなど活動の輪が拡大。会社側からも従業員からも極めて好意的に迎えられたため、1971年には参加企業1055社の中から、とくに口腔衛生に熱心な24社が集まって「産業歯科予防管理グループ」を結成。運動の組織化と一層の内容充実が図られた。その後も「さくらんぼ運動」は、全国各地の職場へ広がり、現在も産業歯科保健活動として働く人々の歯の健康に貢献している。

新しい時代に、新しい活動を

「ライオン歯科衛生研究所」へ活動を一本化

新宿・京王百貨店にLDHが開設した「ライオン・ファミリー歯科診療所」。患者の不安を和らげるため、背後から抱くような姿勢で診療するなど新しい試みを積極的に取り入れた。



この時代まで、ライオンの口腔保健活動は、口腔衛生部と、1964年(昭和39年)に設立された(財)ライオン歯科衛生研究所(Lion Dental Center、略称:LDH)が連携して行っていたが、1984年に活動の強化と効率化を図るため口腔衛生部をライオン歯科衛生研究所に統合。これ以降、すべての活動は公共性の強いライオン歯科衛生研究所が担うことになった。

また、ライオン歯科衛生研究所は、1994年の設立30周年を記念して、略称をLDH(The Lion Foundation for Dental Health)に変更。11月26～27日の2日間、東京歯科大学血脇記念ホールにて国内外の著名な学者を招いた「設立30周年記念セミナー」を開催した。歯科医師のべ400名以上が集うなか、「8020運動、う蝕・歯周病への新しいチャレンジ」をテーマに、熱のこもった講演や質疑が行われた。また、セミナーの初日には、ホテルオークラで記念レセプションを開催し、200名を超える口腔衛生の関係者が一堂に会する一大交流の場となった。



「第1回ライオンNew Yearセミナー」。
以降、毎年1月に継続的に開催され、
2015年には第24回大会が開催された。

直接指導から指導者育成へ

また、1990年代に入るとライオン歯科衛生研究所は、長年続く「学童歯みがき大会」や「たんぼぼ運動」など一般の人々への啓発活動に加えて、「口腔保健の指導者育成」という新たなミッションにも挑戦を始めた。

その第一弾となったのが1992年から毎年1月に開催している「ライオンNew Yearセミナー」だ。これは、歯科衛生士の資質向上を目的にしたセミナーで、歯科衛生士に求められる知識や技能を詳しく紹介するとともに、口腔保健の最新情報を提供する場となっている。日本歯科衛生士会と日本歯科医師会（1997年から）の後援を受け、現在では公益社団法人日本歯科衛生士会第3次生涯研修制度の「特別研修指定セミナー」のひとつとしての役割も担っている。

また1993年には、ライオン歯科衛生研究所のベテラン歯科衛生士が学校関係者や歯科関係者に対して講演を行う「なでしこ活動」が始動。「8020運動」「咀嚼と生活習慣病予防」「ライフスキル教育」など生涯歯科保健をテーマに全国各地で講演を行い、口腔保健のレベル向上に貢献している。



武道館でのビートルズ公演チケット。
協賛としてライオン歯磨、ライオン油脂の名が記されている。

テレビ時代を制する広告王の血統

● ビートルズからライオン奥様劇場まで

小林富次郎商店の創業以来、各時代の最適なメディアを効果的に活用してきたライオンは、テレビ時代の幕開けとなった1950年代後半もその実力を遺憾なく発揮した。

とくに業界の注目を集めたのが、ライオン歯磨(株)とライオン油脂(株)がオールライオンとして共同で番組提供を行うコンビナート宣伝だ。前例の無い試みのため当初は受け入れられなかったが、粘り強い交渉の末、1962年(昭和37年)に1時間の連続ドラマ「アウトロー」を全国放送。これ以降「アンタツチャブル」「逃亡者」「水曜ナイター」「ライオン奥様劇場」など高視聴率番組を次々と放送した。また、1966年のザ・ビートルズの来日公演も、ライオン歯磨・油脂の単独スポンサーで開催。武道館でのコンサートへのインパクトもさることながら、後日のテレビ放送が日本のテレビ史に残る視聴率56.5%(ビデオリサーチ・関東地区調べ)を記録するなど、つねに挑戦的な活動で大きな宣伝効果をあげた。

愛の精神の実践。

昭和初期から始まった大人向けの口腔保健活動は、どれもアイデアにあふれた斬新なものばかりでした。「口腔衛生博覧会」や海水浴場での「歯の美容室」のほか、啓発用のフルカラー映画「星は見ている」や、劇場での「母と子のクリスマスパーティー」、歯科医院用の「口腔衛生カレンダー」制作など、あの手この手の多彩な活動が次々と行われました。それは、人々の健康に奉仕したいというライオンの熱い想いの現れであり、創業以来の社是である「愛の精神の実践」そのものだと言えます。



第5章

これからの オーラルケア

～ ライオンがめざす未来 ～

少子化、高齢化が急速に進み、今までとは全く異なる社会環境の中で、これからの口腔保健活動はどうあるべきか？ 最終の第5章では、過去から未来へと視線を移し、次の100年、ライオンがめざす口腔保健活動の青写真をご紹介します。



健康日本21

国民運動へのひろがり

口腔保健活動が国家プロジェクトに

1913年（大正2年）から、口腔保健活動に努めてきたライオン。その長く地道な活動によって、今や口腔保健活動は、国家プロジェクトとして行政が推進する時代になった。1989年には、厚生省が80歳で20本以上の歯の保持を目的とする「8020運動」を提言。さらに、「健康日本21」（21世紀における国民健康づくり運動）が2000年にスタートし、その法的基盤である健康増進法の中で「歯の健康の保持」が大きな目標として掲げられた。さらに厚生省は2009年、「8020運動」の一層の推進をめざし、ひと口30回以上噛むことを目標としたキャッチフレーズ「噛ミング30」を作成。より健康な生活のために、国民への広い浸透をめざしている。

また、2011年、日本歯科医師会が長年成立をめざしてきた「歯科口腔保健法」が制定。これは、「口腔の健康は、心身の健康に重要な役割を果たしており国民保健の向上に寄与するため、歯科疾患の予防等による口腔の健康保持・推進に関する施策を総合的に推進すること」を目的とした「基本法」であり、国が人々の歯の健康に責任をもつことを明らかにした意義深いものとなった。

「健口美」の実現でQOL向上を

すべての健康は口からはじまる

国や行政による口腔保健活動が活発化する中で、ライオン歯科衛生研究所は、2010年(平成22年)に公益財団法人の認定を取得。新たな社会的責任を担い、歯の健康への一層の貢献に意欲を燃やしている。とくに、日本では高齢社会への対応が急務となっているが、80歳で20本以上の歯を保持している人はまだ約40%に過ぎない。この改善には、従来のようなむし歯予防だけでなく、生涯にわたって「健康な口腔を保つ」取り組みが必要になる。また、歯周病と全身健康との関連性が明らかになるにつれ、歯の健康が、健康寿命の延伸に欠かせない課題となっている。

そこで、ライオンは、「健やかな口が身体と心を美しくする」^{II}「健口美」というコンセプトを掲げ、「食べる」「話す」「笑う」など、日常生活に欠かせない役割をもつ口腔のケア意識を高める活動を展開。Oral Health・Oral Beauty・Communicationを健全に保てるよう適切なケアを指導することで、心と体の健康増進を図り、健康寿命の延伸とQOL向上をめざしていく。また、こうした活動を60ページから紹介するライフステージ別に展開することで、健康で豊かな高齢社会づくりに挑戦する。

健やかな口が身体と心を美しくする

健康寿命の延伸

QOL (生活の質) の向上

身体健康増進

心の健康増進

食べる

話す・笑う

健口美

Oral Health

Oral Beauty

Communication

大切な健康習慣を子どもものうちに

学童期の口腔保健活動

墨田区の食育イベントでの指導のようす。
幼少期に健康習慣をしっかりと身に
付けることが生涯の健康につながる。



子どもたちへの活動は、伝統ある「学童歯みがき大会」に加えて、日常生活での健康習慣の定着に力を入れていく。これは、多彩な学童向け活動を通して、12歳児のむし歯経験歯数は平均わずか1・00本（2014年・平成26年）にまで減少したものの、歯みがき習慣がきちんと定着しないためか、思春期以降、むし歯や歯周病が増加傾向にあるためだ。この時期の健康習慣の形成は、その後の健康の保持増進に大きく影響するため、健康習慣が定着化するようさらに啓発していく必要がある。具体的には地域に密着したイベントや課外授業の中で、幼稚園児、小学生、母親などを対象に、歯みがき指導などの啓発活動を粘り強く展開している。

また、沖縄県石垣市では、2012年から、市教育委員会・養護教諭、学校歯科医と連携して小中学生の歯みがき習慣や保護者の意識を調査するアンケートを実施。その結果を健康習慣の定着に活かすとともに、地域全体を巻き込んだ「子どもの口腔の健康から・健康な地域づくり」の実現をめざしている。

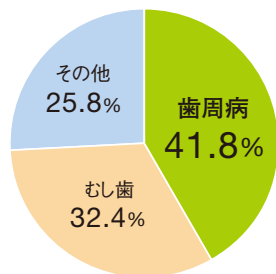
歯周病の啓蒙活動を強化

成人期の口腔保健活動

成人期における最大のテーマは歯周病対策だ。この時期に適切なケアを行うことが「8020運動」の達成や、将来の健康へつながる大きなポイントになる。

歯周病とは、歯と歯ぐきの間（歯周ポケット）などに溜まった歯垢に歯周病菌などが繁殖して起こる病気だ。歯を失う原因の第1位でもある恐ろしい病気だ。歯周病を防ぐには、歯ブラシや歯間ブラシなどによる日常的なケアに加えて、生活習慣の改善も大きなカギになる。喫煙や疲労の蓄積、睡眠不足、ストレスなどによる抵抗力の低下は歯周病リスクを高める大きな要因だ。とくに喫煙は、口腔内を歯周病菌の繁殖しやすい環境にする上、ニコチンが体を守る毛細血管の働きを抑えてしまうため歯周病が進行しやすく、気づいた時には重篤化していることが非常に多い。さらに、ストレスによる免疫力低下も歯周病を悪化させ、治りにくくする原因になっている。成人期の口腔保健活動は、こうした歯周病についての啓蒙活動をしつかりと行うことが重要になっている。

歯を失う原因



痛みがほとんどないため気にする人は少ないが、歯周病は歯を失う怖い病気（公財）8020推進財団「永久歯の抜歯原因調査」より。

歯周病は全身疾患につながる

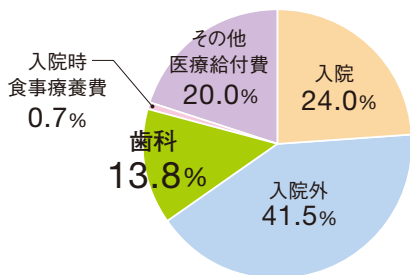
口腔は感染の入り口

ライオン歯科衛生研究所による「歯周病リスク検査プログラム」活動。2012年には11月24、25日に実施し980名の参加者に検査指導を行った。



また最近の研究で、歯周病が、糖尿病や動脈硬化などさまざまな全身疾患に悪影響を及ぼすことが明らかになっている。口腔は、食べ物の入り口であると同時に、細菌やウイルスなどの侵入口でもある。とくに歯周病患者の場合は、細菌の侵入を防ぐ粘膜が歯周ポケット内でただれ落ちているため、細菌が容易に毛細血管に入り全身へ広がってしまう。体内に侵入した歯周病菌は、糖尿病を悪化させる原因になることがわかっており、さらに、脳梗塞や心筋梗塞など動脈硬化性疾患のリスクを高めることも明らかになっている。ライオンでは今後も、医療従事者と連携しながら歯周病と全身疾患との因果関係をさらに解明し、有効な対策を提案していく。また、一般の人々に歯周病への関心を高めてもらうために、独自に開発した「歯周病リスク検査プログラム」や「歯周病予防プログラム」などを精力的に展開。生活習慣のアンケートや歯肉の潜血測定、口腔内清掃度測定などを通して将来歯周病になる可能性を判定。リスクの高い被験者には、歯周病の予防対策をアドバイスしている。

健康保健組合の保険給付費の内訳



2007年度の医療給付費
(現金給付、付加給付を除く)
総額1兆4054億円の内訳

歯周病対策で医療費抑制

歯周病が重篤な人ほど医療費が高額に

さらに、歯周病は罹患率が非常に高く、医療費増大の一因としても指摘されている。厚生労働省の調査によると、40歳を過ぎると歯周病にかかる人が急増し、40〜64歳の日本人の約半数が歯周ポケット(歯周炎)を有することが明らかになっている。このため歯科医療費が大きく膨らみ、健康保険組合の医療給付費に占める歯科医療費の割合は約14%。入院治療を除くと、全体の約5分の1を歯科医療費が占める事象となっている。また、歯周病は全身疾患にもつながるため、歯周病が重篤な人ほど総医療費が高額になる傾向があり、歯周病のない人に比べて累計医療費が21%も高くなる調査結果も発表されている。

ライオンは、こうした働き盛りの人々の健康を守るとともに、健康保険組合の医療費適正化を支援するため、従来から行っている職場での産業歯科保健活動の中で、社員に対する歯周病予防の啓発や、企業に合わせたオリジナルプログラムを提案。こうしたライオンの活動に参加した企業では、一人当たりの歯科医療費を6年間で約2万8千円も節減することに成功するなど、大きな成果をあげている。

健康寿命の延伸をめざして

高齢者の口腔保健活動

口腔を清潔に保つことが、高齢者の健康寿命の延伸につながる。



高齢者向けの口腔保健活動では、口腔の健康を通して、健康寿命の延伸に挑戦していく。日本は、男女ともに平均寿命が80歳を超え世界有数の長寿大国となったが、寝たきりにならず、自立した日常生活を送ることのできる健康寿命は、男性71・19歳、女性74・21歳（厚労省、2014年・平成26年）に留まっている。ライオン歯科衛生研究所では、両者の溝を埋めるため、口腔を健康な状態に保持することで、健康寿命を伸ばす取り組みを行っている。

例えば、京都府の京丹後市と大阪府の寝屋川市の特別養護老人ホームでは、オーラルケアによって誤嚥性肺炎を予防する取り組みを実施している。高齢者は、食べ物を飲み込む時、誤って気道に入ってしまうことがあり、その際、口の中や入れ歯が清潔に保たれていないと肺に雑菌が入り肺炎を引き起こす恐れがある。そこで、お年寄りや施設職員に口腔清掃の指導をすることで、肺炎予防につながる活動を実施。有用なケア方法を全国に展開することで、健康寿命の延伸に貢献している。

口腔機能の向上で認知症予防

また、ライオン歯科衛生研究所では、口腔機能をどのように維持増進させれば、高齢者の健康に貢献できるのか、具体的な手法を開発するための調査研究も行っている。

沖縄県宮古島市では、2012年から2013年にかけて、高齢者の口腔機能を向上させることで、認知機能の低下を防ぐ検証調査を行った。この研究は、ライオン歯科衛生研究所と東京都健康長寿医療センター研究所が共同で行ったもので、地域の歯科衛生士と保健師の協力を得て、65歳以上のお年寄り計162名に対して5カ月間「口腔機能向上プログラム」を実施。口腔の機能を高めるさまざまなトレーニングをしてもらうことで、高齢者の「かむ力」や「飲み込む力」「口全体の清潔度」などが高まり、「遂行機能」「注意機能」なども向上。認知機能の低下抑制につながる可能性を見出した。この結果は、2014年3月に宮古島市平良保健センターで行った報告会で発表され、歯科衛生士や高齢者施設の関係者に対して、口腔ケアの大切さを訴えることができた。



さまざまな道具を使って口腔機能の維持増進を図る。

健口美体操で口を元気に

いつまでもおいしく食べるために

ライオン 歯科衛生研究所では、口腔機能の向上によって、高齢者の健康を維持増進する活動をさらに幅広く展開するために、お年寄りが簡単にできて、口腔機能を高めることができる「健口美体操」を開発。「口のまわりを元気にする」「かむ力を元気にする」「飲み込む力を元気にする」の3つの体操を組み合わせ、口腔機能を支える筋肉に鍛えることで、誤嚥防止や窒息などによる事故防止を図っている。

「口のまわりを元気にする」体操は、唇や頬の筋力を鍛えることで、食べこぼしの予防や正しい発音を可能にするとともに、豊かな表情を作り出すことができるようになり、お年寄りの生活を社交的で活動的にする効果も期待できる。「かむ力を元気にする」体操は、食物を咀嚼する力を高め、唾液もたくさん出るようになるので、お年寄りが食事をおいしく安全に楽しむことができるようになる。さらに唾液がたくさん出るとは「口の中を清潔にする」「むし菌や歯周病を予防する」「飲む込みやすくする」などの効果があるほか、しっかりと噛むことで、脳が活発に働き認知症の予防にも役立てることができる。また、「飲み込む力を元気にする」体操では、飲み込むときに使う筋肉を鍛えることで、唾液や飲



「健口美体操」の効果や方法をわかりやすく紹介するDVDを制作。口の元気を高める活動を推進している。

健口美体操

Lesson 1

「口のまわりを元気にする」体操

1 「ウー」「イー」と口を大きく変化させる



口を思いきりすぼめて。



唇を大きく横に引く。



2 頬を大きく膨らませる



左の頬を膨らませる。



右の頬を膨らませる。



両方の頬を膨らませる。

食物が気管に入ってしまう誤嚥を予防できる。
ライオン歯科衛生研究所では、各地の自治体と協力して口腔ケア講習会などを開催し、「健口美体操」の普及を図り、お年寄りが、いつまでもおいしく食べ、楽しく話し、笑いのある生活を送れるように活動を展開している。

世界で評価される
ライオン歯科衛生研究所

歯周病とメタボの関連性を解明

● 欧米でのダブル受賞を達成

歯周病がさまざまな病気の原因になることが指摘されるなか、ライオン歯科衛生研究所は、2011年(平成23年)、歯周病がメタボリックシンドロームの発症リスクになることを職域成人を対象とした疫学研究で明らかにした。メタボリックシンドロームは、さまざまな生活習慣病の原因になり、脳卒中、心筋梗塞のリスクを高めることから世界的にも有効な対策が求められており、歯周病対策がメタボリックシンドロームの予防につながることは画期的な発見になった。

この研究は、2011年11月、米国歯周病学会(American Academy of Periodontology)の臨床研究賞(Clinical Research Award)を日本人として初めて受賞。翌2012年6月には、欧州歯周病学会(Europar17)で過去3年間歯周病関連論文の中から、ライオン歯科衛生研究所の論文が第1席を受賞した。

ライオン歯科衛生研究所の調査研究活動は、文部科学省から科学研究費認定機関として高い評価を受けているが、今回の米国・欧州ダブル受賞により世界からも大きな注目を集めることとなった。



米国歯周病学会・臨床研究賞を受賞。



「健康をみかく 笑顔をふやすシリーズ」は、コンパクトな新書版サイズで約200ページ。イラストを多用したわかりやすい構成になっている。

ライフステージ別の元氣習慣を提案

「健康をみかく 笑顔をふやすシリーズ」発行

幸せな毎日を過ごす秘訣は「自分の健康を見つめ、良い習慣づくりを行うこと」と考えるライオンは、歯や口の健康だけでなく、全身の健康増進に貢献する幅広い情報発信活動を行っている。2015年には、「健康をみかく 笑顔をふやすシリーズ」として、ライフステージ別に、実践してほしい元氣習慣をまとめた書籍を発行した。

本シリーズは全4冊で構成され、幼児期向けには「赤ちゃんがパパとママにやってみてほしい58のこと」と題して、栄養面からしつけまで子育ての秘訣を解説。さらに学童期向けには「学校では教えない・できる子をつくる74の習慣」、成人期向けには「働く世代が意外と気づかない体の危険信号・これに気づくと人生が一気に好転する。」、そして、高齢期向けには「頭と体を元気に・生涯さびないためのトレーニング」と題して、生涯健康・生涯現役で過ごすために知ってほしい情報を満載。いずれも、「健康」「快適」「環境」をキーワードとして、すべての世代の幸せな今日と未来への貢献をめざしている。

もうひとつのテーマ「予防歯科」

予防歯科の習慣化をめざして

第5章

ライオンがめざす未来

ライオン歯科材（株）は、情報誌「Dent.File」等にて、予防歯科に取り組む歯科医院や歯科衛生士を紹介。予防歯科の普及に努めている。



前述のライフステージ別ケアに加えて、ライオンが、これからの時代のもうひとつのテーマとして取り組んでいるのが「予防歯科の習慣化」だ。「予防歯科」とは、口腔の病気を予防し機能を維持するために、適切なケアを行うことであり、ライオンでは、その具体策として歯科医師などによる定期的な「プロフェッショナルケア」と、自分で行う「セルフケア」の習慣化を提唱している。

また、予防歯科の普及をめざして、ライオンはグループをあげて幅広い活動を推進。ライオン（株）は、ブランドキャンペーン、広告などを通して、生活者に対する予防歯科の啓発活動を行い、歯科材料や歯科治療機器を製造販売しているライオン歯科材（株）は、歯科医師や歯科衛生士向けに、予防歯科の最新情報を提供。予防歯科診療をサポートするとともに、予防歯科を担う医院の増加を促している。また、ライオン歯科衛生研究所は、生活者向けに定期健診の受診や、メインテナンス受診の勧奨のほか、歯科医院への情報提供などを実施。各社による重層的な活動で、予防歯科の啓発と浸透を促している。

日本初の児童専門の歯科診療所「ライオン児童歯科院」(1921年設立)をルーツとする「東京デンタルクリニック」。現在では、予防歯科の先進診療所として新たな役割を担っている。



東京デンタルクリニックで予防歯科医療を強化

また、ライオン歯科衛生研究所では、自らの歯科診療事業においても、予防歯科を積極的に導入。「東京デンタルクリニック」では、従来型の「削る」「抜く」「入れ歯を入れる」という対処療法から、再発防止のための予防管理(メインテナンス)ができる診療体制へ大きな転換を図っている。

う蝕は自然治癒がなく、歯周病も疾病前の状態に戻すのはほとんど不可能であることから、歯科疾患は一度かかったら取り返しがつかない疾病と言える。このため、歯科先進国である北欧や米国では、歯科疾患の予防管理(メインテナンス)が普及し80%以上の人がメインテナンスのために診療所へ通っている。そこで「東京デンタルクリニック」では日本でのメインテナンスの普及へ向けて、受け入れ体制を整備。一人ひとりの歯科口腔疾患リスクに合わせた予防処置を行う「リスク・コントロール・デンティストリー」を導入。「唾液PH」や「唾液中総細菌数」など最大7種類のテストで患者のリスクを正確に判定し、定期的なケアを行うメインテナンス体制を構築している。

歯科衛生士が「予防歯科」の担い手に

患者担当制できめ細かなメインテナンスを実施

また、「東京デンタルクリニック」では、「リスク・コントロール・デンティストリー」を効果的に実践するために、歯科衛生士が大きな役割を担っている。患者に対する最終的な責任は歯科医師がもちながら、むし歯治療の終了した患者や、病状の安定した歯周病患者のケアマネジメントを歯科衛生士が担当。高度な「プロフェッショナルケア」の技術を習得した歯科衛生士が、専門的なリスク検査と、それに基づくスクリーニングなどのメインテナンスを行っている。また「東京デンタルクリニック」では、一人の患者を、専任の歯科衛生士が継続してケアする担当制を導入。一貫性のある予防プログラムや保健指導で、患者の歯と口の健康をトータルにサポートしている。

「東京デンタルクリニック」の前身である「ライオン児童歯科院」は、かつて、日本で初めて歯科衛生士（当時は口腔衛生婦）を育成した診療所でもある。つねに、人々の健康を願い、積極的に新たな挑戦を行う風土が、90余年を経た現在も、脈々と受け継がれていると言える。

世界へひろがる「学童歯みがき大会」

海外5千校・50万人の参加をめざして

学童のむし歯予防に大きく貢献してきた「学童歯みがき大会」は、1932年（昭和7年）の開始から80余年を超えた今も、年々進化を遂げている。従来の「歯磨体操」のような集団指導から、歯みがきを含めた生活習慣の問題を解決する「個別指導型」へと変わり、2008年の第65回大会からは、インターネットによる同時配信もスタート。気軽に大会に参加できる新しいスタイルを確立した。

また、ライオンでは、アジアを中心とした海外でも口腔保健活動を展開し、1984年の台湾を皮切りに、韓国、中国、フィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシアなどへ活動の輪を拡大。そのなかで、「学童歯みがき大会」への海外からの参加も年々増加し、2015年の第72回大会では日本国内からの参加校1287校に加え、アジア7カ国・地域から15校が参加。総参加校数1302校という国際的な一大イベントへと成長した。インターネット配信で、各国・各学校に居ながらにして同じ教材を使って大会に参加できるので「楽しく歯と口の健康を学べる」と関係者から高い評価を獲得。ライオンでは、今後も、国内2万校・100万人、海外5千校・50万人の参加をめざし、子どもたちの健康増進にさらなる意欲を燃やしている。

第70回「学童歯みがき大会」にインターネットを通して参加するタイの小学生たち。



情報のバリアフリー化に挑戦

立体表現でわかりやすい『さわってわかる
歯みがきの本』(右)と『キッズア東京』(左)。



すべての人に口腔保健活動を

ライオンでは、口腔保健活動のさまざまな取り組みを、より多くの人々にお届けできるように、情報発信の多様化にも取り組んでいる。

視覚障害者に対しては情報のバリアフリー化を進め、点字および大活字による製品情報を年2回発行しているほか、1994年からは障害者向けの歯科指導も開始。さらに、口腔衛生についての理解を深めようために、2004年に『さわってわかる 歯みがきの本』を制作。盲学校などで用いられている絵や図を凹凸で立体的に表現した触図の技術を用いたもので、手で触れてもらいながら講習を行うことで格段に理解を得られやすくなった。

また、ハミガキ発売110周年にあたる2006年には、職業体験型テーマパークである『キッズア東京』に、「歯科医院」のパビリオンを出展。歯科医師の仕事を楽しく疑似体験することで、子どもたちに歯の大切さを実感してもらえる機会を提供している。



COI: The Center of Innovation Program

健康寿命の延伸へ向けて

将来を見据えた国家プロジェクトに参画

将来へ向けた新たなチャレンジとして、ライオンは、2015年(平成27年)から文部科学省の主導する産学官連携の国家プロジェクト「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」に参画。弘前大学を中心としたチームに加わり、地域住民の長年にわたる膨大な健診データ(ビッグデータ)から、生活習慣病や認知症など、健康寿命を左右する疾患の予知・予防方法の開発に取り組んでいる。このチームには、多くの研究機関や民間企業が参加し、それぞれの切り口で課題に取り組み中、ライオンは「口腔からスタートする健康づくり」に挑戦。本プログラムは、従来、ほとんど行われなかった歯科と歯科の連携による画期的な試みでもあり、研究成果に大きな期待が集まっている。

100年を超えて、口腔保健活動に情熱を傾けるライオン。「事業を通して人々の幸福に奉仕する」創業の志を大切に受け継ぎながら、これからも、進取の精神あふれる行動力で、人々の健康と笑顔のために弛まぬ努力を続けていく。

次代の課題に挑戦する
LDHシンポジウム

健康長寿に貢献する歯科医療をめざして

● 歯科医療従事者向けのシンポジウムを開催

シンポジウムは、日本歯科医師会、8020財団、日本歯科衛生士会などの後援を得て、東京の虎ノ門ヒルズフォーラムで開催された。



ライオン歯科衛生研究所は、「健康寿命の延伸に向けた歯科医療の使命と可能性」をテーマに、第一線で活躍する研究者、歯科医師などが集い、講演、総合討論を行うシンポジウムを2016年6月26日に開催。基調講演にはアメリカ歯周病学会・前会長、ジョアン・オウトモローグル氏が登壇。「米国では歯周病と糖尿病、心臓病、骨粗しょう症、呼吸器疾患などの関連性が報告されており、今や歯科医療従事者は健康を守る最前線に立っている」とその使命の大きさを指摘した。また、東北大学大学院教授の辻一郎氏は、健康寿命の延伸には医科歯科連携が重要であり、早期の取り組みが急務であると提言。大阪大学大学院教授の天野敦雄氏は、歯周病菌が全身に悪影響を与えるメカニズムについて解説し、口腔の生涯メンテナンスの必要性を強調した。さらに、パネル討論では開業医も参加して熱い議論を展開。人類最大の感染症と言われる歯周病の克服には、最先端治療と、地域の歯科医院による長期的な予防歯科が必要だとその認識を共有し、歯科医療の歩むべき道を明らかにする有意義な機会になった。

人はなぜ、歯をみがくようになったのか？

● 「歯みがき100年物語」刊行

人はいつから歯みがきを始め、どのように習慣として定着したのか。ライオン歯科衛生研究所では、口腔保健活動の基本である「歯みがき」に焦点を当て、その歴史と普及活動の歩みを紹介する「歯みがき100年物語」を2017年に発行した。

歴史を振り返る第1章では、古代エジプトやローマ時代の歯みがき剤や、楊枝を使った平安貴族の歯みがき法、砂や塩で歯をこする江戸時代の歯みがきなど、近世以前の歯みがき習慣を歴史的な資料を交えて興味深く紹介。第二章では、明治以降、日本に歯みがき習慣を定着させるために、ライオンをはじめとする民間企業や歯科医師の団体などが行った口腔保健活動のあゆみを詳しく紹介。さらに、歯みがきの大切さを多くの人々に伝えるために、さまざまな工夫を凝らして制作されたユニークな広告・宣伝や絵本、書籍、映画、イベントなどを第3章に一挙掲載。第4章では、「歯みがきは健康みがき」と題し、全身健康や健康長寿に貢献できる歯みがきの新たな役割を紹介している。全ページにわたってビジュアルが豊富に掲載され、誰にでも読みやすく、文化・生活史としての価値も高い書籍に仕上がっている。



「歯みがき100年物語」、ソフトカバー
B5判 全258ページ。編者・ライオン
歯科衛生研究所、発行・ダイヤモンド社。

歯周病予防で世界に貢献！

薬用ハミガキ・システマ

日本

1993年に、歯周病を予防するハミガキとして日本で発売されたシステマシリーズ。歯周ポケット（歯と歯ぐきのすき間）の奥にひそむ歯周病菌を浸透殺菌し効果的に歯周病予防ができることから、国内でシェア1位を獲得。その後、超極細毛ハブラシも合わせて、各国で続々発売され、多くの人々の歯と健康に貢献しています。



中国

クリーミーな泡がすみずみまで行渡り、歯周病原因菌の巣の内部まで浸透殺菌。さらに、歯ぐきの出血まで抑える歯周病予防ハミガキ



香港

先端0.02mmの超極細毛が狭いガムラインや歯間に入り込んで効果的に歯垢を除去する高機能ハブラシ



インドネシア

きめ細かい泡が素早く広がり、初期う蝕の修復を助けるナノカルシウムとフッ素を配合した高機能ムシ歯予防ハミガキ



マレーシア

先端0.02mmの超極細毛が狭いガムラインや歯間に入り込んで効果的に歯垢を除去する高機能ハブラシ



シンガポール

浸透殺菌成分IPMPと抗炎症成分GK2を配合。菌から歯ぐきを長時間保護し、歯ぐきの発赤、腫れを緩和する歯周病予防ハミガキ



韓国

高い分散性で、きめ細かい泡が歯と歯ぐきの隅々まで行き渡り、歯周病原因菌の巣の内部まで浸透殺菌する歯周病予防ハミガキ



台湾

普通のハブラシでは届きにくい歯と歯のすき間や歯周ポケットもきれいにする日本技術由来のハブラシ



タイ

浸透殺菌成分IPMPと抗炎症成分GK2を配合。ミクロの泡が広がって、口臭や歯周病の原因となる歯垢の蓄積を抑えるハミガキ



ライオン健康セミナーの歴史

1992年より開催してきた「ライオン New Year セミナー」は2017年から「ライオン健康セミナー」に名称を変更いたしました。

※敬称略

開催年	回数	テーマ	演題	講演者
1992	1	歯周疾患に関して	歯周病の概念を問い直す	長谷川 紘司
			歯肉に健康を探す	宮下 元
1993	2	歯周疾患に関して 8020運動	歯周治療における歯科医師と 歯科衛生士のチームワーク	鴨井 久一
			8020運動における歯科衛生士の役割 各分野の歯科保健指導	網元 愛子
			8020運動における歯科衛生士の役割	目等 節代 北山 祐子 田島 睦子 中川 晴江 秋吉 敏子
1994	3	感染予防対策は どこまで必要なのか？	必要な新しい院内感染予防の考え方	池田 正一
			診療室における院内感染予防の実際	田口 正博
			Touchless	栗山 純夫
			小児の予防業務における院内感染予防	野間 歌子
1995	4	8020運動： 高齢者における歯科保健	保健指導は歯科医療を変えるか？	新庄 文明
			歯科保健指導の現状と将来	高橋 節子 岸田 恭子 筒井 睦 吉田 幸恵
1996	5	8020運動： 成人期における歯科保健指導	なるほどザ保健指導	岡崎 好秀
			成人期における歯科保健指導の現状と将来	網元 愛子 石渡 美砂子 野村 正子 滝口 佳子
1997	6	これからの歯科衛生士 診療報酬改定後の最新情報と 期待される歯科衛生士の活躍	1997年の歯科界を展望する	宮武 光吉
			歯科衛生士の業務に関わる保険点数改正	槇石 武美
			これからの歯科衛生士の役割を考える	栗山 純雄 深井 穰博 近藤 加奈子 内山 登美雄 牛山 京子

開催年	回数	テーマ	演題	講演者
1998	7	豊かな人生への掛け橋 ～これからの口腔ケア～ シンポジウム 「知っておきたい咀嚼と健康」 ～歯科衛生士としてどうかかわるか～	高齢者の全身管理と口腔ケア	海老原 洋子
			高齢者の口腔ケア	下野 正基
			知っておきたい咀嚼と健康	寺岡 加代
			咀嚼と健康	中島 一郎
			かむかむクッキング	田沼 敦子
			義歯でおいしく食べる	山田 晴子
1999	8	大変な時代を生きる ～トータルヘルスのなかで求められる歯科～ シンポジウム 「高齢者の食生活と口腔ケア」 ～いつまでもおいしく味わうために～	高齢者の総合診療と口腔ケア	磯原 弘
			高齢者の食生活と口腔ケア	向井 美恵
			食べる機能の加齢変化	
			高齢者の食と栄養学	鈴木 幸子
			食を通じた介護テクニック	溝越 啓子
			要介護高齢者の口腔機能の回復と食生活支援	細野 純
2000	9	激動の時代を乗り越える ～期待される歯科衛生士とは～ シンポジウム 「2000年見えてくる歯科衛生士の役割」	新たな時代に期待される歯科衛生士像	石井 拓男
			2000年!見えてくる歯科衛生士の役割	花田 信宏
			バイオフィルム感染症と歯科衛生士	
			PMTC-口腔ケアの実践的テクニック	内山 茂
			適切な情報に基づく口腔ケア	豊島 義博
2001	10	期待される歯科衛生士をめざして シンポジウム 「口腔を通して健康を考える」	高齢者の口腔ケアを考える	竹内 孝仁
			口腔を通して健康を考える	奥田 克爾
			全身の健康破綻にも関わる口腔細菌	
			食物の取り込み口としての口腔	柳沢 幸江
			生活習慣病と口腔ケア	西村 英紀
2002	11	シンポジウム 「8020へのキーステージ」 ～ミドルエイジの特徴とその対応～	ミドルエイジの健康にどう取り組むか	藤田 雄三
			ミドルエイジのライフスタイルと生活習慣病	福田 洋
			ミドルエイジの口腔状態と機能を考える	柿木 保明
			増える口腔疾患に対するモチベーションのポイント	鈴木 基之
2003	12	歯科衛生士は 頼れるお口のアドバイザー	100歳まで元気にごきげんに生きる!	坪田 一男
			口腔環境の変化とその対応	眞木 吉信
			加齢に伴う口腔環境の変化と健康科学	米山 武義
			口臭の原因と患者への対応	安細 敏弘
			診療室での対応	保坂 誠

※敬称略

開催年	回数	テーマ	演題	講演者
2004	13	予防歯科の近未来を探索する 一見えないう蝕が見える時代にー 新しい時代の歯科衛生士の役割ー	予防歯科の革新に向けた取り組み	瀧口 徹
			新しいう蝕のとらえ方	花田 信弘
			う蝕の予防と初期う蝕の回復	中嶋 省志
			初期う蝕の科学的な検出技術の現状と 臨床応用の実例	神原 正樹
2005	14	財団法人ライオン歯科衛生研究所 設立40周年記念セミナー 歯科衛生士のための歯周病予防最前線 ー口腔からはじまる全身の健康ー	ここまでわかってきた歯周病と全身の関係	鴨井 久一
			あなたはどこまでできる？ プロケアとセルフケアの支援	伊藤 公一
			セルフケア剤の最新テクノロジー	森嶋 清二
2006	15	健康長寿の実現をめざして ー21世紀に求められる歯科衛生士の役割ー	健康長寿と免疫	奥村 康
			イキイキライフは歯と口の健康から	川口 陽子
			健康長寿に向けた歯周病の管理	山本 浩正
			ウェルエージングと口腔ケア	植田 耕一郎
2007	16	口腔力で脳力アップと全身の健康増進 ー歯科衛生士はお口の健康コンサルタントー	オーラルヘルスケアによる全身の健康増進を どう人々に伝えますか？	野口 俊英
			嚙んで脳力アップー口腔と脳の不思議な関係ー	小野塚 実
			高齢期の口腔力のアップによる生活機能の向上	北原 稔
			診療所に於ける真のコミュニケーション能力の向上	渡邊 麻理
2008	17	あなたとクライアントのための“健口美” ー魅力ある歯科衛生士をめざしてー	免疫力アップで健口美をつくる	安保 徹
			自然で美しい歯と笑顔	宮崎 真至
			食べて健康	幕内 秀夫
			人との距離を縮める健口美	品田 佳世子
2009	18	あなたとクライアントのための“健口美” 第2弾 ー高齢者の健口美“生き生きライフの実現をめざして”ー	笑いの科学	中島 英雄
			高齢者の元気を支えるオーラルケア	藤本 篤士
			高齢者とのコミュニケーション	川崎 陽一
			口元の美しさへのアプローチ	高野 ルリ子
2010	19	ライフステージからみた健口美 ー歯科衛生士は生涯を通じたお口のアドバイザーー	コンピューターで探る顔の秘密	原島 博
			子どもの口の発育と食育	向井 美恵
			ミニマムな歯周治療を目指して!	竹内 泰子
			超高齢社会におけるかかりつけ 歯科医師・歯科衛生士の使命	米山 武義

開催年	回数	テーマ	演題	講演者
2011	20	心身を支える健口美 ～魅力ある歯科衛生士を目指して～	免疫力をつける生活	藤田 紘一郎
			歯周治療の成功を目指して	若林 健史
			人はなぜ話せるのか、なぜ誤嚥するのか？	館村 卓
			MFT（口腔筋機能療法）を診療所に 取り入れていくには	大野 隼英
2012	21	健康寿命の延伸をめざして ～歯科衛生士への期待～	病気になりやすい性格	辻 一郎
			食卓の向こう側に見えるもの	佐藤 弘
			ちからのみかた	内山 茂
			オーラルケアと医科歯科連携	阪口 英夫
2013	22	健康寿命の延伸をめざして ～ライフステージとともに考える歯科衛生士の役割～	おいしさの秘密	伏木 亨
			口から育つところと身体	佐々木 洋
			歯科からできる健康寿命延伸への貢献	山本 龍生
			食べることができなくなったとき	井上 誠
2014	23	健康寿命の延伸をめざして ～歯科衛生士が支える すこやかな心身～	からだと心の健康づくり	森谷 俊夫
			いつまでも美味しく味わうために	佐藤しづ子
			21世紀の科学で語るペリオドントロジー	天野 敦雄
			口から食べることの素晴らしさ	野原 幹司
2015	24	健康寿命の延伸を目指した 口腔機能への気づきと支援 ～ライフステージごとの機能を守り育てる～	ライフステージにおける気づきと支援	
			小児期における口腔機能の発達と食べ方支援	向井 美恵
			思春期の特徴と口腔機能への支援	眞木 吉信
			成人期の生活習慣病予防と口腔機能への支援	吉江 弘正
			高齢期の生きる力を支える口腔機能への支援	植田 耕一郎
			総合討論	
2016	25	健康寿命の延伸を目指した 口腔機能への気づきと支援 ～新たな時代の歯科衛生士の役割～	免疫と長生き	奥村 康
			歯科衛生士が行う歯周基本治療の 可能性と優位性	関野 仁
			食べることに問題のある患者に 歯科は何かができるのか？	菊谷 武
2017	26	健康寿命の延伸に向けた 歯科医療を目指して ～歯科衛生士に期待される役割～	これだ！健康長寿の食生活	新開 省二
			歯周基本治療を再考する	長谷川 嘉昭
			口から食べる幸せを守るための 予防的アプローチ	藤本 篤士
			口から食べる幸せを守るための 包括的アプローチ	小山 珠美

ライオン口腔保健活動
100年の歩み

発行所

公益財団法人
ライオン歯科衛生研究所

発行

2017年5月

